

◎旧朝香宮邸の歴史を訪ねて

連載◆第38回 朝香宮家旧蔵《三羽揃ペリカン(ペンギン)》置物

Residence of Prince Asaka 1933—

三羽のペンギンが列をなすこのユーモラスな置物は、デンマークのロイヤルコペンハーゲン窯で制作されました(図1)。ロイヤルコペンハーゲンは1775年の創設以来、デンマーク王室と関係の深い磁器工房として知られてきた名窯です。かつて宮邸内を飾っていたこのペンギンたちは、宮家が白金台の地を離れて以来久しく行方がわからずにいましたが、2010年(平成22)8月に発見され、関係者の尽力によって美術館に里帰りすることとなりました*1。



図1

19世紀の後半から20世紀初頭にかけて盛んに行われた極地探検の影響もあり、北極圏に生息する白クマや南極大陸のペンギンといった当時世界に知られたばかりの珍しい生物は、陶磁器や彫刻のモチーフとしてたいへん人気がありました。

この作品は、最後尾の個体の足裏に緑色の手書き文字で「417B.」と記入された型番から、当時ロイヤルコペンハーゲンの作品アーティストとして活躍していた彫刻家、テオドール・マッドセン(1880-1965)が1902年にデザインしたモデルであることがわかります*2。同一の型から起こされたペンギンを3体並べて成形し、釉薬の下に色絵付けを行う釉下彩(アンダーグレース)という技法で着

彩されています。足裏にはさらに「184」と読める、絵付けを行ったペインターの識別番号も付されています。付属する木箱には墨書で「丁抹國製陶器 三羽揃ペリカン」(箱側面)、「大正十四年十二月 両殿下御帰朝ノ節御持帰品」(蓋裏)と記されていて、この置物が朝香宮夫妻が滞欧中に入手し、帰国の際に持ち帰った品のひとつであることを物語っています(図2)。ペンギンではなく「ペリカン」と題されているのは、おそらくペンギンそのものの存在がまだ広くは知られておらず、嘴が長く伸び

びている様子から、この特徴に一番近い既知の鳥類の名称を付したためではないかと考えられます。

朝香宮夫妻が日本の家族に宛てて送った絵はがきから、滞欧中にデンマークを含む北欧諸国を訪問したことが明らかになっています。この置物はおそらくそのような旅行の折か、パリ滞在中に購入又は贈呈されたものと推測されます。鳩彦王はこの置物をたいへん気に入っていたようです。1933年(昭和8)の竣工後間もなく撮影された小客室の写真(図3)には、室内に

置かれたキャビネットの上で来訪者を出迎えるペンギンたちの姿がくっきりと写っています。彼らはその愛らしい姿で、宮家の人々に滞欧中の思い出を伝え続けていたことでしょう。(牟田)



図3

図1.正面(腹側)から見たペンギン。3体とも同じ型から成形されていますが、焼成時の変形や絵付けの差により、表情や雰囲気微妙な変化があります。



図2.付属木箱。構造や材質から、この木箱は帰国後にあつえられたものと推測されます。

図3.1933年(昭和8)当時の小客室。左側のキャビネット上に、頭を右に向けたペンギンたちが写っています。画像提供:宮内庁

*1.この作品の発見と公開に際しては、栗原直弘様(株式会社富士鳥居代表取締役)より多大なるご支援を賜りました。

*2.ペンギンの足裏には、このほかに同社の刻印(1894年から1922年にかけて使用されていたタイプ)と、デンマークを囲む3つの海峡を象徴した三本の波線が絵付けされています。本来は刻印の下部に手書きされるものですが、このモデルの場合はスペースの都合で中間と最後尾の足裏にそれぞれ分けて記されています。なお、制作年・デザイナー等を調査するにあたり、株式会社ロイヤルコペンハーゲンジャパン・マーケティング部より貴重な情報のご提供を賜りました。